

女性の起業家は今でこそ珍しくないが、私が事業を始めた1960年代半ばにはまだずいぶん珍しかった。それもブライダル関連という当時の日本ではまったくなじみがない仕事だったから、女性はもとより、男性にもまったく理解してもらえなかった。

仕入れ先や販売先で話をする相手はみんな男性。門前払いは当たり前で、話ができても「若い女が何を言っているんだ」という冷ややかな目で見られ、まともに取りあってはもらえなかった。自分が男だったらと

歯がゆく、何度も悔しい思いを味わった。

女性差別の社会の空気にぶつかり、疲れ切っていたころ、立ち寄った書店で何気なく手に取ったのが渡辺淳一氏の「花埋み」だった。氏が直木賞を受賞した70年に出された長編小説で、「日本最初の女医の物語」という帯の文句に惹かれて購入したと記憶している。

もともと読書好きだった私だが、この小説には特別に引き込まれた。そこには日本で初めて女性として医師の国家資格を取った明治の女性、荻野吟子の数奇な運命と苦難の生涯が描かれていた。17歳で嫁いだ吟子は、当時治療法もなかった淋病を夫から移され、子供を産めない体になってくる。病院で

## 「負けられない」勇気をもらおう

見られる恥辱を味わい、同じ思いで苦しむ女性を助けたいと女として医学の道を志す決意をする。

しかし時代は幕末からの封建的な風を色濃く残す明治。吟子は男子ばかりの医学校に入り、これ以上ないほどの嫌がらせに遭いながら勉学に励む。さらに女だからという理由だけで医術開業試験が受験できない。無法に、たった一人当局に乗り込んで立ち向かおうとする。想像を絶する苦勞を重ねながらようやく女医第一号として合格するくらいは本当に感動的だ。

こういう女性が日本に、自分たちの先達にいたという事実が驚き、当時の自分の苦勞とも重ね合わせて深く感銘を受けた。同時に、自分には病気のハンディもなく、これほどひどい差別も受けなかったと強く反省させられた。「私も負けてはいられない」。仕事で壁にぶつかるたびに読み返し、勇気をもらおう私の宝物だ。



「日本最初の女医の物語」という帯の文句に惹かれた

渡辺淳一著「花埋み」